

15期 舟田 節子

富士山が爆発してといった天変地異がおきたわけでもないのに、登れなくなるなんて…。それもウイルスのせいなんて、想像したこともありませんでした。

某月刊機関誌の「山と花」コーナーに、今回は11年前（2009年）の、聖岳～光岳の縦走アーカイブを取り上げました。5日間の初シルバーウィークのお蔭で、関西OB会の遠征に便乗し、厄介な2山を消化できたという思い出です。TVもアーカイブ放送ばかりなんだから、この際、一昔前でもいいわ！と開き直っての掲載です。

それをきっかけに山記録を遡ってみると、日本百名山を完踏する前年にあたるこの年は、実に94日間、山にいました。

ちなみに、続いての10月は

3～4日 五竜岳、唐松岳（山友と）

11～12日 巻機山、苗場山（地元発ツアー）

16～17日 甲武信岳（地元発ツアー）

23日 天城山（東京発ツアー前日の単独）

24～25日 丹沢山、蛭ヶ岳、桧桐丸（東京発）という具合でした。



<2010.9.3の新聞記事>

山道具も山衣類も、洗濯し乾燥しては、広げたてである座敷と山とを往復状態でした。

転職し、まだ体力があり、子育ても卒業していた

から、幸いにやれたこと…とっていました。チャンスに食欲に探し、調整すれば、やれるものよ！と、自慢気味にもなっていました。

今、このうち、どれだけを叶えることができるでしょう！？NHKの「にっぽん百名山」も、再放送をやっては、「現在営業していません」が、必ず流れています。そのたび、この山まで、登れなくなっているんだ…のため息につながってしまいます。

あの当時、山小屋も、交通機関も、ツアー会社も、それぞれが、機能しているのは、ごく当たり前でした。そうであって、初めて、食欲も可能…ということなのでした。

僻地トレッキングの時には、「日本に生まれたお陰」なんて何度も痛感しましたが、まだまだ、痛感レベルではなかったわけです。

古希を迎えるにあたり、「社会に感謝、無難に過ごす日常に感謝」の謙虚を学んだのは、よかったかもしれません。走っているのが当然だったのが、ブレーキがかかり、地に足のついたともいうべき、日常が続いていきました。

まず、天袋いっぱいのスライドの山をスキャンしてPCに取り込む…という「偉業」が、達成できました。

おじいさんは、4枚ずつ延々とスキャンし、おばあさんは、データノートと突き合わせ、キャプションを整合させ、閑居ストレスをぶつけ合うことない、共存ステイホームがやれましたとさ…だったのです。

高価だったのに、それでもポジフィルムを使った時代がありました。講演はスライドを映写機で見せるもの、添付写真は、ポジフィルムで提出するもの…の時代でした。ちょうど、自分の動き盛り、活用盛りに重なってもしました。

ところが、マットへの書き込みくらいでは、スライド整理ができません。活用するほど、元のケースに戻せない…が増えていきました。仕事現役、家庭現役、山現役を兼ねて、かたやにデジカメ、かたやにPCの習得となると、もう手一杯。過去のスライドの整理は、ますます厄介事になっていきました。わかっちゃいるけど手をつけられない！…頭痛の種でした。

有り余る時間があって、そのうえ、外出できない今回こそが、千載一遇の機会となりました。

取り込みさえすれば、明るく、大きなディスプレ

いで、楽しみ、コピーも編集も自由自在です。

これから、クリックだけで、にこにこと遊んでいられます。100 年人生の時代に向けて、何よりの玩具の準備ができました。

さらに、一階だけで住めるように、大片づけもやりました。今回は2階を息子夫婦に明け渡す（コロナ禍で、頓挫中）という心積もりで、収納場所を半減させる…という大ナタをふるいました。ちなみに、アイゼンも（ようやく?）、金属ゴミになりました。

「この先、使うことがあるだろうか?」で、見切りをつけ、身軽になっておく…これも、100 年人生にむけての「自分の始末」です。

ごみの分別がややこしく、かつ有料になっているのですから、「片付け」は、時間と処分費用がかかる大仕事です。

私達の世代は、物のない時代を経験した親が、豊かになるとともに溜め込んだ品々を、処分せねばならない世代。それでいて、わが子達は引き継がない世代と心得、墓終いまで手配しなければならない世代なのです。気力・体力のあるうちに、やらねばなりません。

何度も片付けてきたはずでしたが、「押し込んでお終い」としていた物も、全て取り出し、「捨てる」寄りで点検していくことになりました。すると、大昔のワングルのパンフレット類が出てきました。金沢を離れたことがなく、また、女房殿のゴミ査定を受ける側ではなかったので、これまで廃棄を免れてきました。でも、次の同期会に披露して一緒に懐かしんだ後は、雑紙処分に回そうと思っています。



<1970 年当時のパンフレット>

思い入れがあっても、何を残し、何を捨てるか? これは、組織になると、なお、厄介です。何世代もが絡むと、なおさら、手の付けられない状況になっていきます。さしあたり温存の判断が続いていき、ますます手の付けようがなくなっていくます。

今回の紙面を借りて、ワングル部の記録に関して、知るところまでを述べておくことにします。

(以下、代表者名を記していますが、協力者はほかに多数と、理解して下さい。)

創部 35 周年にあたる年 (1993 年) が、ちょうど城内キャンパスから、角間への最終移転の年でもありました。前年の 36 期蒲原君の剣岳滑落事故が、現役 OB 双方の協働も生み、35 周年総会にて、事務局を OB 側におくシステムでの OB 会は、再興されました。

そして、角間部室へ最終移転の日、「新部室へ移動する物」「廃棄する物」「処分に迷う物」の仕分けを現役にしてもらいました。残された「処分に迷う物」について、OB が最終チェック。卒業記念写真の額縁入りといった大型段ボール 2 つ分の品々は、分別抜きで、初代 OB 会長の 13 期大島さんが引き取られました。

45 周年 (2003 年) にて、舟田は 10 年にわたる事務局、会報編集長を交替となりました。そこで考えたのは、35 周年記念誌編集時に集めた資料+10 年分の記録類の、確実な保管先です。

旧城内部室では記録類は散逸状態であり、一方、新部室は他部とのシェア状態でした。置いておけば、誰かは管理してくれる…など、甘い認識です。

そこで「部誌 Bergheim 全冊」「OB 会報全冊」「事故報告書などの冊子状印刷物、歌集など」の記録類を、金沢大学附属図書館に寄贈としました。前田顧問が、ちょうど図書館の世話役もされていたので、二代目 OB 会長 15 期奥名さんとともに、委託してきました。

また、35 周年記念誌は、国会図書館、ヤマケイ、大町山岳博物館に寄贈。OB 会活動アンケートにご協力頂いた、21 大学にも寄贈しています。

結果、記念誌類を集計俯瞰した「ワンダーフォーゲル活動のあゆみ」(城島紀夫 古今書院) には、金大の事例が何か所にも引用されることになりました。

記録類は、どなたかが膨大な時間を使って、スキャンするのなら、好きなように閲覧も可能と思われます。ただ私は、どなたにも、「今」という時間の方が大事だと思います。思い入れがあるのは当事者だけ、誰かの労力をあてにしてまで、存続を望むことはありません。記録は紙媒体までで留める…は、妥当な判断です。

山小屋ベルクハイムも、もう、判断すべき時に来ていると思います。

初代のままの石垣部分から上を、何度か大々的改築をしましたが…。平地に立つ我が家ですら、30年後のリフォームをやりました。人が住んでいて、そのうえでプロなりの手を入れて、建物とは維持できるもの…。素人のままで、そう思います。

山小屋は、かつて、犀川ダム建設により廃村になった倉谷の家屋を解体して、営林署から高台の土地を借り受け、1964年に完成しています（6期合津さん達の活躍）。

残っていた家屋群は朽ち消え、炭焼き作業道としての住人の往来もなくなり、犀奥は、もっぱら、金大ワングルのホームグラウンドとして活用されていました。新人トレに使い、登山道整備がつきものの小屋作業にも使い、駒帰から徒歩3時間にも関わらず、週末には誰かが山小屋に入っていて、KUWVのシンボルともいえる存在でした。

でも、それらは、昭和のあたりまで。新トレが離れ、小屋作業も間遠になっていきます。

屋根に穴が開き、床から萩が咲いていた状態から復活させたのは、やはり、剣岳滑落事故の後の現役達（36期石川主将の時代）。

その後、15期桂さん（1970年5月の、新トレ事故）の追悼碑の補修をきっかけに、山小屋酒場が始まり、OBの手での補修が続いています（13期辰野さん、吉田さん、16期北川君 他の活躍）。

また、登山道整備の補助金は、当時のナカオ山岳会の代表が、金沢市にそんな主旨（草刈りをやっているような団体に、多少の助成を行う）の制度があることを教えてくれ、叶ったものです。



<1995. 9. 23～24 月見の宴>

高三郎に立つ道標は、2000年10月、金沢市からの発注をナカオ山岳会が受け、現役（43期の加藤君、西脇君、45期深作君）を標柱担ぎ上げバイトに雇い、施工しました。

ダム湖ボートは、18期椿川さんに管理事務所の物を手配してもらい、後には地元猟友会の故山下さんをお願いしていました。現在は甥ごさんが請け負ってくださっています。

通常、ダムへ至る道路やダム湖周辺巡回道の補修は必須らしいですが、行き止まりである犀川ダムの場合は、緊急性なし。不通時のために、ヘリポートも作られています。今後も、駒帰からやや奥の、寺津のゲートを開ける必然はないのです。

許可をとらないと、入れないような鍵のかかるゲート経由では、山小屋は、通常利用ができません。見た目どおり、「入らないで下さい」です。

そんな倉谷の山小屋活用や、そこを経由しての高三郎登山は、常識的には無理です。

近年の、降れば集中豪雨なみの天候は、一帯を原始に戻しつつあります。

さて、今年6月8日に、医王山で、南砺市の老女の遭難事故がおきました。喧嘩して夫より先行しての道迷いで、1か月後に、三蛇ヶ滝の下流で、ストックや衣類の切れ端が見つかりました。ナカオ谷乗越（白元山とダオ山の鞍部）以降で、不明になったものです。搜索協力もしましたが、ナカオ新道へ迷い込んだ可能性が高いと、ナカオ会員達の心痛は募りました。

もともと、ナカオ新道とは、やはり1960年代に伐開された山道です。大池平で私有地規制があった（これがきっかけで、ワングルは犀奥へ進出となりました）昔は過ぎ、まず、富山県側が、さらには1996



年には石川県側が自然公園になりました。それまでの既成道は黙認状態とされ、「整備してもらえたら、ありがたい。その際には事後報告をしてほしい」の了解をとっています。何度かの内紛を経緯して、今も必ず、整備に入っています。

ともあれ、この8月に、初心者がうっかりでも迷い込むことのないような標識を道の真ん中に立て、虎縄でも結界してきました。



<2020. 9. 21 医王山中尾谷乗越での安全策>

かつて、高三郎からさらに奥まで登山道が延びていた時代、延ばそうとしていた元気な時代、がありました。ところが当局からは、「その道で遭難者が出たらどうする」と苦言されて、鎮静していったようです。善意だからいいというものではないのです。

今では、旧倉谷集落へ入る手前すら挟れていて、へつり状態ですし、その奥の登山道も、もともとの急坂にくわえ、藪盛りです。雪と豪雨で、毎年崩落も激しいです。麓に生活者のいない高三郎は、本来の自然に帰ろうとしています。

すでに、新トレ場所から外れているうえ、5～6月を過ぎると、1300m ぐらいの藪山に魅力を見出すのは、とても難しい。現役達が行きたい山なら他にいくらでもあります。「ワンゲル伝統の山」とこだわるのは、現役にも、OBにも無理。仕切り直す時期は、来ていると考えます。

もし「山小屋」なる空間が必要であれば…。医王山の近くの集落で、持て余し気味の大家屋を、協定を結んで、利用できるとすればいいかでしょう。金大は、今では地域交流、地域おこしにも励んでいます。所有者に基本管理をしてもらい、年間利用料を払い、もしくは格安利用料を設定し、部員もOBも気

楽に活用できる、山里空間に。

本来求められた山小屋とは、部員同士の交流を深める物であったのではないのでしょうか。負担になるのではなく、より、山の魅力や、ワンゲル部の魅力を増すものでなくては意味がありません。

現在の、行き辛くて、維持し辛いベルクハイムは、プラスに機能していません。ここで見過ごせば、さらに重荷になるだけ、さらに手のつけようのない遺物になるだけです。

十分思い入れを持つOBがいる間に、そんな人達の手で、「本当の小屋終い」を、きちんとやりませんか？ せっかくOB会組織があるのなら、まずここでの意見交流と、次なる行動をお願いします。



<2002. 5. 11～12

ワンゲルとナカオ山岳会の合同登山道整備>

年金世代の方達が、新たな登山道伐開に励んでいるニュースをあちこちで聞きます。「限界集落」の村おこしが、客を集め、成功事例と、持ち上げられてもいます。いい話題の方とはいええます。

でも、これは一過性です。子育て世代が移住してこない限り、集落は継続できません。

「子育て卒業し、年金で安泰となっている世代」が、余った時間と体力で残り火を掻き立てても、否応なしに、歳はとり、体は動かなくなっていく。そのあげく「われらはここまで頑張った。あとは頼んだ」と次世代に押し付けるのは、かなりの身勝手。自分達だけの満足です。

その点には、私は冷ややかな目をもっています。

赤字国債、原子力発電ほか、「後は野となれ、山となれ！」的な、快適を、自分のせいではないとばかりに、私達は続けていますが…。

少しでも片付けて、清々しい空間にしていこう…できる範囲のことなら、呼び掛けたいです。